

宇野千代全集

第十二卷

宇野千代全集 第十二卷

昭和五十三年六月十日印刷

昭和五十三年六月二十日發行

著 者 宇野千代

發行者 高梨 茂

印刷者 山元正宜

發行所 中央公論社

東京都中央区京橋二一八一七

電話〇三(五六一)五九二一

振替東京二一三四

検印廃止

©一九七八

隨筆 四

目次

随筆 V

模倣の天才

7

わたしの青春物語

18

亡き友

54

自伝的恋愛論

61

私の文学的回想記

122

雑纂

「おはん」について

241

『貞潔』あとがき

『親しい仲』あとがき

『私の文学的回想記』あとがき

「風の音」について

『雨の音』あとがき

『八重山の雪』あとがき

『ママの話』あとがき

『水西書院の娘』あとがき

あとがき

書誌

年譜・主要著書目録

大塚豊子編

267 264 263 260 256 255 254 250 247 246 245

隨筆

V

模倣の天才

私は明治三十年の十一月二十八日に山口県の岩国で生れた。今年三十八である。子供の頃は
そのころの町の風潮をそのままうけて、女であるけれども戦争に行きたいと思い、ナイチンゲールのような優しい看護婦かジャンヌ・ダルクのような勇敢な女士官になりたいと思った。学校の唱歌はみんな軍歌であった。「道は六百八十里、長門の浦を船出して」とか「雪の進軍氷を踏んで」とかいう歌はいまでも唱うことが出来るくらいによく覚えてゐる。小さい小さい豆本にそんな軍歌がぎっしり印刷してあつてそれが一冊五錢、それからいまの改造文庫くらいのうすい唄本が続いて何冊となく出たものである。中でも「赤い夕陽にてらされて」とか「時計ばかりがこちこちと」とかいう、口語で綴られた歌の中の文句はそのまま子供の胸にひびいて、遠い戦地の野面を吹く風の音まで聞えるように思われた。いま思うとあの口語体の軍歌が私の一番はじめの文学書なのであつた。

雑誌とか新聞とかはやかましやの父親が読むことを禁じていた。私は厠かわやへ行く振りをしてそつ

とその日の新聞を持込んで、廁の下を吹く風に腹の冷えるのも忘れて読み耽った。新聞には「己が罪」とか、「嫁ヶ淵」とかいふ新小説がのつていて、何のことかよく分らなかったけれども見も知らぬ神秘な大人の世界のことを書いてあつて子供の心を危険な腫物のように膨れ上らせて了う。私は幾度廁で父親に見つかつてお尻をなぐられたか分らぬ。ああ、どんなに小説というものは面白いことが書いてあるか。父親にとめられればとめられるほど私は隠れて読むことを考えた。裏の蔵の中に、十年も前からの新聞が積重ねてあつたり、「都の花」とかいふ古い雑誌がしまつてあつたりするのを発見して、うす暗い窓の下で日の暮れるまで読み耽つたのを思い出すが、同じ蔵の中にはまた若い頃は放蕩無頼の徒であつたという父親の女からよこしたものらしい手紙なども、あの忠臣蔵のお軽の文のように天地を紅色に染めた長い巻紙に書いたものが幾通となく紛れ込んでいた。父親はたぶん若い頃の自分のことを考えてその子供が同じような困り者の娘になることを惧れていたのであるが、もしそうであつたならば父親の教育法は間違つていたのである。私は無暗に父親のさせぬことをしたがるようになったから。

この父親が私の十六のときに死んだ。近所の人は母親や私に向つて悔みを述べたあとで、「じやが、これからはほんにお気楽になれやすですよ。のう」と言つてやかましやの父親の死んだことをひそかに喜んでくれたくらいで、いま思うとあの父親は日本の小説の中に出て来る人物ではなくてバルザックとかドストエフスキーとかの好んで描きそうな型の男であつた。父親が死んだ。

私は涙を瀧のように流したがやはり何となく嬉しかった。私はもうどんなことでも出来る。ただ一つ私は町の女学校の生徒でこの女学校もまた新聞と雑誌とを禁じていたけれどもそんなことは何でもない。私はいろいろのものを讀んだ。「第三帝国」「青鞥」。ああ、「原始女性」は太陽であつた。私たち女学生は自分のことを「太陽であるかも知れぬ」と思い乍ら型通りの回覧雑誌をつくつて、何か非常に抽象的な詩や論文のようなものを書いた。間もなくこの回覧雑誌は教師の眼にとまつて或る日の午後、私たち同人は寒い校長室へ呼ばれた。「私は諸姉の書いたものが諸姉の本心から出たものではないことを信じている」校長は愁わしげに重々しい口調でそう言つた。窓から風が吹き込んで、校長の机の上においてある哀れな回覧雑誌の頁は幾度もはたと翻つてはまた閉じた。そして誰かの嚙り泣く声が出たと思うとみんなそれに合せて泣き始めた。私たちは何が悲しいのか分らぬけれども、この悲しみは何か非常に高い世界のものであるように思われた。私たちは高いものとか深いものとか遠いものとかいう言葉が好きである。この校長もまた私の死んだ父親と同じように生徒の教育法を誤っていたのである。私たちはやがて今度は学校のそこにある新しい、「活版」で刷つた同人雑誌の仲間に加わるようになり、まだ一度も聴いたことのない東京言葉の会話をもつて恋の場面を描いた「小説」を書いてゐる友だちとも知るようになった。そしてときどき同人は町の写真屋へ集まつて、男は麦稈帽子シヤガラぼうしかステッキを女は造花の菊の花か蝙蝠傘こうもりがさを片手にして或るポーズをつくり、記念撮影をしたのである。

女学校を出るとすぐに私は町から一里くらいの農村の小学校の先生になった。月給は八円で年末賞与は五十銭であった。先生。私は筒袖の袖口を日本武尊やまとたけのみことの着物のように太い飾り紐でしぼったのを着て青い袴を胸高に穿き白粉をつけて出て行つた。私は家から離れて学校の近くの川の傍に百姓家の離れを借りて自分ひとりの「独立」した生活を始めた。私は自分の儲けた金で米を買い石鹼を買つた。そして毎日その支出を手帖に記して行くと月末には締めて三円五十何銭かの支出になり四円若干かの金が残るのであった。三円五十銭ですむ生活。朝は早く起きて黒豆をばちばちと焙烙ほうろくで煎りその煎り立ての豆にじゅっと醬油をかけて煮豆をつくるのである。私は昼も夜もその煮豆で飯を喰べた。そして学校では極めて厳格な先生であつた。広い運動場で私は体操の号令をかけた。海から吹いて来る潮風がポプラの高い梢を吹き子供たちの汚れた前垂まえたれと私の長い袴とを濡した。木柵のところには生徒のおじいさんがもたれかかつて孫の帰るのを待っているのである。授業のあとで私は少しオルガンを弾いた。そして感情をこめた低い声で歌を唱つた。私は恋をしていた。ああ、青春の愉しさ。生活の愉しさ。私はもう自分のことを「太陽であるかも知れぬ」と思うことの替りに、一匹の蝶々のように思うのであつた。私は「詩」も「論文」もまるで書かなくなつた。私は忙しくてとてもそんなものを書いてゐる暇がないのである。「詩」や「論文」に書くことを私は自分でじかにしているのであつて、あの「活版」刷りの同人雑誌の中に誰かの書いていた小説のような恋もしてゐるのではないか。どうして自分で小説など書く必要

があるものか。

私はこの十八の春から処女作の発表された二十六の春になるまでまるで一行もものを書こうとはしなかった。私は毎日働きそして恋をして、それで日が暮れて了うのである。始めの間はあんなに愉しかった生活と恋とはだんだん苦しいものになった。私は或るとき内海通いの小さい汽船に乗って田舎を出たのである。ぼお、ぼお、と汽笛が鳴った。朝靄の間からまだ電車の通わないレールと松の生えている山と岸に立っている母親の姿とが見え、やがて見えなくなった。私は小さい風呂敷包みと蝙蝠傘を持って東京へ出た。私は何をしよう。何よりも私は働かなければならなかった。私はまだ若いものだからもっとあとで何でもしたいと思うことをすることが出来るだろう。私は毎日街を歩いた。仕事はたくさんある。しかし私はその日からパンにありつかなければならぬ。ホテル。料理屋。西洋料理店。ただ体だけしか持っていない若い女は一度はそんな店の軒の下を通る。私はホテルの給仕女になった。それから西洋料理店の給仕女にもなった。雑誌社の女事務員、家庭教師、生花講義録の編輯助手にもなった。アメリカの活動写真の筋書のようだと、ここできまって金のある様子の好い恋人が現われて来て私を素晴らしい海水浴場か山の温泉へつれて行く筈なのであるが、私の恋人はいつでも背の低い貧乏なほんの詰らぬ男であった。私はいつでも働いた。その中に私の恋人はやっと学校を卒業してその赴任地である札幌から私を呼んでくれた。私は急いで働くのをやめて汽車に乗った。雪が降っていた。私は窓のかつとん（か

あてんのこと）を下してコークスのストーヴを焚きながら

私は好いお客さんになった。保険会社の出納係である私

きに寄った。りんりん、りんりと馬櫓の鈴の音がきこえ

いうよいことであろう。私はもう何も心配なこととはなくな

の勉強を始めることが出来る。私は炬燵の上に板をおいてその上に紙とペンをおいて、そして良

人の書棚からぬいて来たベーベルの婦人論を熱心に「訳」し始めた。私は平塚らいてう氏か山川

菊栄氏かのようにになれるかも知れない。良人は夜おそく帰って来た。「スコベンヒューア曰くっ

て、これは何だい？」「人の名前じゃあないの」と私は答えた。スコベンヒューアというのはシ

ョペンハウエルのことなのであった。良人はながい間ははははと声をあげて笑っていた。私

はペンをおいて溜息をした。何というながい冬であろう。私はまたかっとなを下して靴下を編み

始めた。すると私の頭にあの私の勤めていた西洋料理店へ毎日昼食をとりに来ていた一人の客の

顔が浮んだ。店の女たちはその客のことを、「金太郎さん」と呼んでいた。「金太郎さん」である

瀧田樗陰氏はその頃店の前の銀行の三階にあった中央公論社から、午報の鳴るのと同時に店にや

って来て十五分間で五皿の料理を食べて了い、がっと思にビールをのみ乾して銀盆の上へ五十

銭玉を投げ出すとさっさと出て行つて了う。私はその五十銭玉でどれだけ自分のほしいものを買

ったことだろう。そうだ。もう一ぺんあの五十銭玉をあのひとつが呉れるかどうかやって見よう。

私は毎日毎日書いた。それが小説というものかどうかわからぬが、私は書けるところだけを書き、書けぬところはどんなに飛ばした。私はいくらでも書ける。百枚ほど書いて私はそれに「墓を發く」という重々しい題をつけた。それは一読して作者自身かと思われる正義の念に燃えた一人の若い女教師が、不具の子供を中心に義務教育における一斉教授の不合理を絶叫している一篇の勇ましい傾向小説であった。私はそれを送り出した後までも興奮していた。私は中条百合子女史のようになれるかも知れない。ように、ように。私はいつでもまるで女の子が人の鞵をほしがるときのように、「ように」と思う。私はながい間待った。ながい冬が明けて雪どけの地面の上に葦の花が咲いた。私は行って見よう。「金太郎さん」はあの私の大切な小説をどこかの棚の上へおき忘れて了ったのかも知れない。私はうすいショールを首にまいて汽車にのった。汽笛が鳴った。プラットホームの柱の蔭に立って私を見送っていた良人の姿は見る見る中に煙の中に包まれて、やがて見えなくなった。私は泣いた。あの優しい良人を残して私は行かなければならぬのであったから。

東京へ着くと私はすぐに中央公論社を訪ねた。瀧田氏は私の姿を見ると、「出ていますよ」と言っ**て**、ぼんと机の上へ印刷したばかりの雑誌を投げてよこした。ちょっとした間私は何のことかわらなかった。私の小説が「中央公論」の五月号に出ているというのであった。その雑誌は二、三日うちに売り出される。私の胸は激しく動悸がして来て何か不確かな危惧の念のようなものが腹

へ落ちるのである。私の小説が出ているのだ。私は瀧田氏に礼を言うのも忘れて階段を駆け下りた。誰にこれを話そうか。そとへ出ると私は往還の向いにあるあの昔の西洋料理店をちらと横眼で見て、それから一散に駆け出した。広い東京である。私の懐には生れて始めての原稿料である三百幾円かの大金が入っているというのに、誰も私を知らないのだ。何という素晴らしいことであらう。私の頭の中にはあの小説の始めの一行から終りの一行までが全部まるで一枚の板に書いた文字のようになって一どきに浮んで来る。とうとう私は「偉い女」になったのだ。とうとうあのひとから大きな五十錢玉をまた貰ったのだ。恐らく瀧田氏は私が、あの給仕女であつた私が小説を書いたということに興味を感じて、あれを読んでくれたのであらう。給仕女が小説を書く。それはどこかの育ちの好いお嬢さんの書いたものより確かに六割方とくであるに違いない。(同じ意味で私はいま自分が男でなくて女であることをさえ幸運だと思っている。)

だがこの幸運だということはほんとうの幸運とは何の縁もないものである。私は一躍して女流作家になったけれども、さて何を書いて好いか分らなかった。何の「ように」書いたら好いのかさえも分らなかった。やつのことで私は八年ほど前に読んだことのある「楊牛全集」と「自然と人生」とを思い出した。あの昔の着物でか？ 何よりも私は何の「ように」書くかということに決める必要ならぬ。可哀そうな私は大急ぎで、そして死物狂いで目に触れる限りの内外作品の小説を読み出した。私はあの成上り者のお内儀かみぎさんのように大急ぎで着物の着こなしを